

マルコ1章「福音の始まり」

1A キリストの福音の始まり 1-13

1B 道備え 1-8

2B 御霊の働き 9-13

2A 御力の現れ 14-39

1B 弟子の召命 14-20

2B 悪霊も従う権威 21-28

3B 熱病の癒し 29-31

4B 戸口に集まって来る人々 32-34

5B 別の町村への福音宣教 35-39

3A 人々への証し 40-45

本文

マルコによる福音書1章を開いてください。私たちは今日から、マルコによる福音書を見て行きます。今日は1章を見て行きます。私たちは、これまでマタイによる福音書を読んできました。マタイは、その書き出しが、「ダビデの子、アブラハムの子孫、イエス・キリストの系図」とあるように、ダビデの子、つまりユダヤ人の王としてのイエスを描いていました。新約聖書の初めの福音書としては、相応しい福音書でしょう。私たちに非ユダヤ人にとっては、全く意味のない呼び名ですが、ユダヤ人の人がそれを読むと、びっくりするそうです。それまでは、キリスト教の書物で、マリア像など、異教的で、異邦人のもので、偶像崇拜的なことさえ考えるような印象を抱いていたところが、いきなり「ダビデの子」から始まり、「アブラハムの子孫」から始まると、もろユダヤ人向けに書かれていることが分かるそうです。ユダヤ人でイエスを自分のメシアと信じる人々には、多かれ少なかれ、革命的なことが、心の中で、また頭の中で起こります。

1A キリストの福音の始まり 1-13

けれども、マタイによる福音書の最後は、「あらゆる国の人々を弟子としなさい」というイエス様の命令で終わっていました。ユダヤ人だけでなく、イスラエルの神を知らない異邦人にも、この方の弟子になるようにバプテスマを授け、教えなさいと命じておられました。そして、イエス様が十字架に付けられ、死なれる前後で起こったいろいろな出来事を見て、ローマの百人隊長が言った言葉を思い出してください。「マタ27:54 この方は本当に神の子であった。」神の子であった、と言っています。ローマには、数々の神々がいました。けれども、イエス様が十字架に付けられている時のそのお姿、罵られても罵り返さない姿、そして空が真っ暗になった様子、そしてイエス様が死なれてから起こった地震など、それはユダヤ人の律法を全く知らずとも、この方は全能の神の子であるという悟りが、与えられたのです。そのように、教え以上に、その起こったこと、イエスが行なわれた

ことを見て、ローマ人である百人隊長は神の子であると言いました。

マルコによる福音書の冒頭を見てください、「1 **神の子、イエス・キリストの福音のはじめ**。」神の子という言葉から、始めています。そうです、マルコはローマ人の読者を念頭に入れて、書いていると言われています。「教えられていることは、よく分からないが、その行いを見て、知りたい」と願っているローマ人の訴えに答えるかのように、マルコは、マタイにあるような教師としてのイエス様の姿ではなく、せっせと動いておられる僕としてのイエス様の姿を描いています。教会で、背後でせっせと、黙々と動いて奉仕をしている人がいますね。主に命じられたことをことごとく行っていく姿は、まさに僕の姿ですが、マルコはイエス様が行なわれていることに注目し、その姿を生き生きと描いています。「すぐに」という、話の接続の言葉が繰り返し出てきて、忙しく動いておられるイエス様が見えてくるのです。1章から8章までは福音宣教の働きの中で、動いておられるイエス様の姿が前面に出ており、8章の最後でご自身が十字架の道を進まれることを弟子たちに明かされた所からは、十字架への道で、ご自分の命を代価とするところまでの僕の姿を表しています。

マルコは、興味深いことに使徒ペテロとも、また使徒パウロとも共に働いていた弟子でした。ペテロ第一の手紙の最後に、ペテロはマルコのことを「**私の子(5:13)**」と言っています。信仰による子ということで、ちょうどパウロにとってのテモテのような存在です。バビロンから挨拶をしているとペテロは言っているのですが、それはローマの隠語ではないか？とされています。ペテロ第一の手紙は、小アジアにいる信者たちに主に書かれています。ローマにおいて次第に厳しくなっているキリスト者への迫害を考慮して、ペテロが書いています。そこにマルコがいました。ペテロが使徒の働きで説教している部分などを読みますと(例えば、コリネリウスに対する説教 10:34-43)、マルコの福音書の描き方にとっても似ています。ですから、マルコはペテロから直接聞き、またイエス様にも少年として同行していた可能性があります。

ですから、「ペテロによる福音書」のような要素も、大いにあるでしょう。マルコによる福音書を見て、ペテロが知っているイエス様を描いている可能性は大きいです。マタイによる福音書にはない、イエス様の行動の細かい部分での表現が多く出てきています。また彼の性格は直情的で、また学問を究めているわけではなく、マルコ自身もおそらくそうだったので、ギリシア語が日常会話のものであり、文法的に必ずしも正確ではなく、当時ユダヤ人が使っていたアラム語の影響が強いそうです。また、先にローマのキリスト者たちを念頭に書いたのではないかと話しましたが、ユダヤ教のしきたりの話になりますと説明が長くなり、またラテン語の影響を受けた言葉も出て来るそうです。そして使徒 12 章に、マルコの名が出てきます。ペテロが、ヘロデによって殺されることになっていた時に、御使いが来てその牢を開けて、彼が出てきましたが、行った所が、「**マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家(12 節)**」であります。多くの人がペテロが解放されるために祈りに専念していましたが、それだけの人たちが入ることのできる家ですから、比較的裕福な家庭だったのでしょう。

そして興味深いことは、バルナバの従兄弟だということです。コロサイ書の最後のところに、ローマで軟禁されているパウロが、共にいる人として、「バルナバのいとこであるマルコが、あなたがたによろしくと書いています。(4:10)」と書いています。他の訳ではバルナバの甥となっていて、意見が分かります。バルナバは、パウロをエルサレムの教会の弟子たちのところに連れて行き、またアンティオケの教会で共に奉仕をした同労者で、第一次宣教旅行をともにした人であることを思い出してください。その時に、マルコも同行していたのですが、キプロスから小アジアに上陸しようとした時点で、エルサレムに帰ってしまいました(使徒 13:13)。その苛酷な環境に耐えられなかったのでしょうか、ホームシックにかかったのでしょうか、途中で辞退してしまいました。第二次宣教旅行の時に、パウロがマルコは連れて行くべきではないと主張し、バルナバは連れて行くと主張して、それぞれ分かれて宣教に出て行くことになりましたね(使徒 15:36-41)。

けれども、その後パウロは、マルコと宣教旅行の中で合流しているのです。先に話したように、彼がローマで軟禁状態の時に獄中書簡を書きましたが、エペソ書と共に、コロサイ書、そしてピレモン書を書きましたが、コロサイとピレモンにマルコが自分と共にいることを書いているのです。それから、彼が再び捕らえられて、今度は皇帝ネロに死刑にされることがほぼ、はっきりしていた時に、ローマの獄中で書いたのがテモテ第二の手紙ですが、そこではテモテに対して、「ルカだけが私とともにいます。マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。(4:11)」と書いています。ですから、パウロとバルナバの間に起こった不和は、一時的なもので、パウロはその後は、マルコを良き働き人として受け入れています。

ということで、マルコは、十二使徒ではなかったけれども、パウロを含む使徒たちに囲まれていて、また主の働きを行っていた人であると言えます。彼は、この福音書の中だけに書かれている言葉で、おそらく自分のことを書いているのではないか？と思われる箇所があります。イエス様が捕えられるところで、一人の青年が逃げている場面があります。「14:51-52 ある青年が、からだに亜麻布を一枚まとっただけでイエスについて行ったところ、人々が彼を捕らえようとした。すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、裸で逃げた。」おそらくこの青年はマルコではないか？と言われていません。三度、イエスは知らないと言ったペテロといい、裸になって逃げたマルコといい、新約聖書の著者がここまで自分の失敗を明らかにしているのですから、そこにあるへりくだり、自分の罪深さを知っていて、自分は罪赦された、神の恵みによって救われた者であることを強調しているでしょう。

1B 道備え 1-8

1 神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。

先ほど話したように、マルコはイエスを「神の子」として紹介しています。これから、イエス様が悪霊を追い出される場面が次々と出てきますが、5章におけるレギオンとの対決の場面は、他

の福音書よりも、最も詳しく、生々しく出てきます。神ご自身の子であることを知っている悪霊どもが、次々とイエスの前に現れて、恐れをなし、挑んで来る場面が出てきます。そして、「イエス・キリスト」であります。イエスがイエシュアという名前で、ヘブル語のヨシュアと同じです。ヤハウェが救われる方であることを表しています。そしてキリストは使命を表して、油注がれた者、メシアであり、世を救われるために任命された方です。この方が、神の子であり、私たちに救われる方なのだというのが、ここでマルコが話していることです。

そして「福音」であります。「良い知らせ」ということです。ローマにおいて、「良き知らせ」というのは、皇帝崇拝の儀式に関わることです。皇帝崇拝においては、皇帝は神の子であり、彼が生まれ、人々に認められ、高い位に着いたことをお祝いする祭りが、ローマ世界全体で行われていました。その時に、「福音」という言葉を使っていました。イザヤが預言をして、神が王となってシオンに戻って来られるのも、良い知らせと呼んでいます(40:9)、ローマ人にとっても福音、ユーアンゲリオンは、すぐにどのようなことを指しているのかが分かります。マルコがここで言いたいのは、ローマ皇帝ではなく、「イエスこそが、あなたがたを救われる方であり、神の子」であり、この方こそが私たちに与える福音なのだ、ということなのです。

2 預言者イザヤの書にこのように書かれている。「見よ。わたしは、わたしの使いをあなたの前に遣わす。彼はあなたの道を備える。3a 荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ。』」

マルコの福音書の中では、唯一、ここだけにマルコによって旧約聖書が引用されています。イザヤを引用しているのですが、実は二つの預言を重ね合わせています。「見よ。わたしは、わたしの使いをあなたの前に遣わす。彼はあなたの道を備える。」は、マラキ書 3 章 1 節で、それからイザヤ 40 章が、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ。』」であります。私たちの主イエス・キリストの優れているところは、前もって告げられていたということです。そして、ご自身が来られる時にその手前で来られる備えをする使者が送られることも、預言されていたということです。どこに、そのような指導者がいるのでしょうか？宗教の教祖がいるのでしょうか？ここからして、イエスが単なる人間ではない、神からの方なのです。

3b そのとおりに、4 バプテスマのヨハネが荒野に現れ、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。5 ユダヤ地方の全域とエルサレムの住民はみな、ヨハネのもとにやって来て、自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。

ヨハネという名前はありふれていましたが、バプテスマ、つまり水に浸す、浸礼あるいは洗礼を受けるヨハネと呼ばれていました。彼が、荒野に現れました。エルサレムから東、死海の西と北に広がるユダの荒野です。そこで宣べ伝えていたのは、「罪の赦しに導く悔い改め」でした。悔い改

めとは、思い直すことです。これまで自分が握っていた人生や生活の舵を、自分ではなく神に握っていただくことです。自分にある罪を悔いて、そこから離れて、神に立ち返ることです。そうすれば、「罪の赦し」が与えられます。これまで一切犯した過ち、罪や咎が全て洗い清められます。そして、バプテスマを受けると言うことは、「その中に一つになる、一体になる」ということを意味します。つまり、悔い改めを口先ではなく、心から、本当に自分自身をゆだねて行なうということです。

ユダの荒野はユダヤ地方にありますが、そこにいる人々が全域からやって来ました。そしてユダヤ人の都であるエルサレムからもやってきています。どんどん人々がやって来ては、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを受けています。ここで彼らが、「罪を告白し」ていますね。告白とは、同意することです。神が罪であると言われていることに、「はい、それは罪です」と同意することです。自分は正しいと、正当化していたところから、「確かにあなたが言われているとおりです」と認めるところに、告白があります。そうすれば、神はすべての不義から私たちを清めてくださいます。

6 ヨハネはらくだの毛の衣を着て、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。

彼の風貌は、かつての預言者エリヤに似ています(2列王 1:8)。エリヤは、イスラエルの民が神に背いて、偶像を拝んでいたのもので、その進む方向に待った！をかけて、神に立ち返るように説いた預言者です。同じようにヨハネが、悔い改めて神に立ち返るように説いています。そして、「いなごと野蜜」であります。いなごは、レビ記 11 章で食べて良い生き物、汚れていない生き物として数えられています。そして、野蜜ですが、いなごもそうですが、荒野においても手に入る食べ物です。こうやってヨハネは、荒野からの声として預言を成就していました。

7 ヨハネはこう宣べ伝えた。「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません。8 私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります。」

ヨハネは、救い主ではありません。ヨハネは、飽くまでも救い主が来られる備えをしているだけの人間です。それで彼は、「私よりも力のある方が私の後に来られます。」と宣べ伝えました。そして、「履き物のひもを解く資格もありません」というのは、当時、しもべが主人の履き物を解いていましたが、そんな資格がないほどの低い者であるということです。そして、この方が来られると聖霊が臨まれることを予告しました。自分は水でバプテスマを捧げているが、この方は聖霊でバプテスマを授けますと宣言しています。その実現は、使徒の働きで見ます。数多くの人々が、聖霊の満たしを受けて、それで力ある働きを行っていきます。私たちも同じです。悔い改めによって罪を赦していただき、罪を赦していただくだけでなく、聖霊の力によって、イエス様のように生きるのです。そしてイエス様の働きにあずかるのです。

2B 御霊の働き 9-13

9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレからやって来て、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けられた。10 イエスは、水の中から上がるとすぐに、天が裂けて御霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった。11 すると天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」

イエス様が地上で宣教の働きを行われる時に、ご自身が聖霊の力を受けられました。まず、イエス様はガリラヤのナザレという村で育ちました。そこから、バプテスマのヨハネから、バプテスマを受けられます。マタイの福音書では、ヨハネがそんなことはできませんと断るのですが、今、私たちは正しいことを行うのだとイエス様がヨハネに話されます。これは、後に私たち弟子たちがそうすべきこととしての、模範を残されたのです。私たちもイエスの名によるバプテスマを受けるのです。そして、その時にこの方が確かに神の子であるとする証言がありました。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」です。そして聖霊が鳩のように降っているのです、ここに三位一体の神が全て関わっておられることが分かります。

ところで、鳩は平和や清さを示している象徴です。ノアが箱舟から、乾いている土地はないか探すために鳩を放って、オリーブの若葉を口に加えて帰ってきましたが、裁きが終わり平和が来て慰めが与えられたこと、また鳩は、猛禽である鳥とは違って清い動物としていけにえに捧げられます。イエス様が、清い方であられて、平和の使者であられます。私たちも聖霊に満たされる時に、平和を造る者、また心の清い者として立てられるのです。

ここで父なる神が、ご自身の子を愛しておられて、また喜んでいと宣言しておられます。イザヤ書では、この「喜ぶ」という言葉が、メシアを表す「主のしもべ」に使われています。「42:1 見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。」イエス様は、神の子であるから、父なる神から愛されているだけでなく、主のしもべとして選ばれて、それゆえに喜ばれています。主は、この中に私たちを招き入れてくださいました。主の仕える者とされました。主は、恵みによって私たちの奉仕を心から喜んでおられます。忠実に仕えている者を主は喜んでおられます。そして、主のしもべは、その働きのために御霊が注がれています。同じようにキリストに仕える者は聖霊を受けて、その賜物によって主の働きをします。

12 それからすぐに、御霊はイエスを荒野に追いやられた。13 イエスは四十日間荒野にいて、サタンの試みを受けられた。イエスは野の獣とともにおられ、御使いたちが仕えていた。

イエス様は、主のしもべとして、この地上で仕えます。つまり、悪魔のいる領域へと入ってきました。父のふところにいるところから、人として仕えられる時に、悪の勢力と対決しなければいけません

ん。そのために、御霊がイエス様を荒野に追いやられます。荒野というのは、旧約聖書では、預言者が、罪や不義のゆえに神によって裁かれたところとして表れることが多いです。そこで、四十日間断食をされていたことが、他の福音書に書いてありますが、サタンが試みます。それに打ち勝たれた後に、イエス様は「野の獣とともにおられ」とあります。預言書には、神によって裁かれたところには、ふくろうやダチョウ、山犬、ジャッカルが棲むところとして描かれています。そのような中にいる、苛酷な状況であったことを示しています。

けれども、御使いが仕えています。イエス様が、ゲッセマネの園で血をしたたらせるような汗を流されて祈っている時も、御使いが仕えていたとルカが書き記していますが、激しい霊の戦いによって疲れている時に、御使いが支え、仕えてくれるのです。エリヤも、イゼベルから離れて逃げて、シナイ山に向っている途中で、御使いが来て、食べ物を食べさせていました(1列 19:5-6)。主は、私たちにも御使いを遣わしてくださっています。私たちを守り、私たちの世話をしてください。

2A 御力の現れ 14-39

こうやって、バプテスマを受けられ、荒野での試みを受けられてから、イエス様はガリラヤに戻られて宣教の働きを行われるのです。ちなみに、13 節から 14 節に入る時には、一年ぐらいの空白があります。ヨハネの福音書に、その期間に起こったことが記されていますが、マルコはそういった時系列的なことを気にしていません。実は他の福音書の著者もそうです。ルカが、それでも少し詳細に順番通りに書こうと努力しています。マルコは、あくまでもイエス・キリストを宣べ伝えているのです。この方のなされたことを伝えて、ローマにいる人々がイエスの福音を受け入れ、すでにキリスト者となっている者たちには、迫害や困難の中にも勇気を出して、キリストの弟子としてこの方に倣って生きられるように、励ましているのだと思います。

1B 弟子の召命 14-20

14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。15 「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

ヨハネが捕えられ、イエス様はご自身もいずれ捕えられるということは心の片隅に入れて、それで宣教の働きに従事されます。ガリラヤで行われたのは、イザヤが 9 章で預言をしていたからです。ガリラヤにて、神の光が闇の中で輝くと。それで、ここでは「神の福音」とマルコは読んでいます。先には、イエス・キリストの福音でしたが、ここでは神の福音です。神がもたらす良い知らせです。神のところに帰って来られる良い知らせです。神ご自身が来られ、また神の支配が臨む、神の国が来たのだというのが、良い知らせです。

それでイエス様は、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」と言われました。時が満ちたとは、旧約時代の預言者がずっと神の国が来ると預言していたからです。今や、

その時が満ちました。ゆえに、自分の在り方を捨てて、神に立ち返って、この良き知らせを自分のものにしなさい、信じなさいと説いておられます。ところで、ここでイエス様は悔い改めなさいと言われました。使徒ペテロも、聖霊が降った後に、ユダヤ人たちに悔い改めなさいと説きました。そして、黙示録の七つの教会の多くに、イエス様は悔い改めなさいと言われました。悔い改めなくてよい、思いを変えなくてよい、ただ信じればよいのだという教えがありますが、それは間違いです。悔い改めるからこそ信じることができ、信じるというのは、思いを変える、つまり悔い改めなしにはできないことです。

16 イエスはガリラヤ湖のほとりを通り、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。

イエス様は、宣教の働きにおいてご自分の弟子たちを召し出されました。お独りで活動されませんでした。宣教命令にも、「弟子としなさい」という命令があります。私たちは、一行になる、つまり一チームになって宣教を行います。それで、シモン、つまりペテロとその兄弟アンデレをイエス様は呼ばれています。ここでイエス様は、彼らが仕事をしている時に呼ばれていることを見てください。私たちは、キリスト者となる時に普通に仕事をしていたでしょう。それと同じです、主の働きをする時も、自分に与えられた仕事をしている時に呼ばれます。そしてイエス様は、「人間をとる漁師にしてあげよう。」と言われます。漁師であったのですから、まるで異なる働きに彼らを招き入れておられます。けれども、励ましておられるのです。同じように漁をするのだ、福音を宣べ伝えることも、魚が人になっただけで、漁をすることには変わりはないと言われて、それで励ましておられます。

そして大事なのは、「すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。」というところです。他の福音書を読めば、ここにはいろいろな紆余曲折があったことが書かれていますが、マルコは、イエスに従う時は、潔くすべてを明け渡したということです。自分の古い世界、自信をもって生きて行く世界を捨てて、ただイエス様に拠り頼む世界に移るということです。

19 また少し先に行き、ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネをご覧になった。彼らは舟の中で網を繕っていた。20 イエスはすぐに彼らをお呼びになった。すると彼らは、父ゼベダイを雇い人たちとともに舟に残して、イエスの後について行った。

次も兄弟ですが、ゼベダイの子二人ですね。ヤコブとヨハネです。ヤコブは、後にヘロデ・アンテイパスによって殺されてしまう使徒です(使徒 12:2)。イエス様の半兄弟で、エルサレムの教会指導者となるヤコブ、ヤコブの手紙のヤコブとは別です。そして、ヨハネは使徒ヨハネのことです。彼らも漁師でありましたが、ここでの特徴は、父ゼベダイに雇われていたところ、その場を離れたということです。つまり、職業だけでなく、父からも離れたということです。アブラハムも、父の家から出

て、わたしの示す地に行きなさいと召されました。イエス様に従うということは、自分に属している家との葛藤があるということです。父と母、そして兄弟姉妹がいます。そこに対する帰属意識は変わることはないのですが、本質的なところで神の家族に入ったという意識があります。ですから、ちょうど結婚の時に、父との関係は変わらずとも、父と母から離れて妻と結ばれるように、キリストに結ばれるために、父から離れます。

2B 悪霊も従う権威 21-28

次に、イエス様が悪霊と対決する、生々しい場面が出てきます。

21 それから、一行はカペナウムに入った。イエスはさっそく、安息日に会堂に入って教えられた。
22 人々はその教えに驚いた。イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。

イエス様はユダヤ教のラビでありました。ですから、安息日に会堂、シナゴークで律法の朗読をされます。その時に、人々は驚きました。ユダヤ教のラビは、誰かのラビの解釈を持って来て、それで権威付けします。しかし、イエス様は、「わたしは言います」と言われて、権威をもってお語りになりました。そうです、福音宣教者も、「聖書はこう言っています」と言って、宣言するのです。こう思うという意見ではなく、こう感じるという感想でもなく、説明でさえありません。宣言であります。

23 ちょうどそのとき、汚れた霊につかれた人がその会堂にいて、こう叫んだ。24 「ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」25 イエスは彼を叱って、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。26 すると、汚れた霊はその人を引きつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。

これから、どんどん悪霊、汚れた霊が出てきますが、これはイエス様が公の働きをされる時に悪魔の試みを受けられた所から激しく始まっています。悪魔がこれらの汚れた霊どもを引き寄せていると言えるでしょう。黙示録 12 章には、悪魔を示している竜が、その尾で天の星、すなわち天使の三分の一を引き寄せて、地に投げ落としたとあります(4 節)。今までになく、悪霊どもの動きはイエス様が働きを始めていた時には多かつたのでしょう。

当時、霊の戦いが繰り広げられます。名前を呼ぶのです、この汚れた霊は「ナザレの人イエスよ」と呼んでいます。そして、「私たちと何の関係があるのですか」と言っています。イエスが来られたということで、彼らの中にある秩序が崩れかけてしまったのです。それで叫んでいます。福音を信じるというのは、このように悪の勢力に対して挑みかかることです。ですから、自ずとこれまで何も起こっていなかったところに、何かが起こる、騒ぎ出すということが起こります。そして、「私たちと何の関係があるのですか」というのが、興味深いです。後にレギオンをイエス様が負い出される時

に、豚を飼っている者たちが出て行ってくださいと要求します。人が解放されたのに、そういうのです。人々は、解放されたいと願っているけれども、実はそのままのままでいたいと願っています。悪を愛してしまうのです。今までのやり方、今までの秩序を壊されたくないのです。それで、「私と関わらないでくれ」となるのです。

汚れた霊は、イエス様の正体を知っていました。「私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」と言っています。そうです、神からの方、神の御子であることを彼らは知っているのです。しかし、イエス様は「黙れ。」と言われました。今、ご自身が神の子であることを知らせる時ではなかったのです。イエス様はご自身を低くされ、時が来るまで、ご自身に従い、心を開く者たちのみ、ご自身のことを明かされます。それまでは、ご自身の行いによってご自身が誰なのかを自ずと知っていただくようにしていかなければなりません。そうやって、へりくだって神に仕えられるのです。私たちも同じです、もちろん福音の言葉をもって伝えますが、聞いている人たちは私たちの行いを見て、確かにその通りであると確認して信じるのです。言葉に力があるから、信じることができます。

26 節には、生々しい、悪霊が出て行く様子をマルコは描いています。私は、このような対決はしたことがないですが、数多くの人から悪霊との対決の話は聞いたことがあります。実際に、このようにその人が出すことのできない力を出し、その人の声ではない声を出し、そして出て行く時はもがきますが、出て行けば正気に戻ります。

27 人々はみな驚いて、互いに論じ合った。「これは何だ。権威ある新しい教えだ。この方が汚れた霊にお命じになると、彼らは従うのだ。」28 こうして、イエスの評判はすぐに、ガリラヤ周辺の全域、いたるところに広まった。

悪霊という霊の存在が聞き従う教えです。このように、ただ教えがあるのではなく、権威と力を持っている教えです。パウロが言いました、「ロマ 1:16 福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」そして、この出来事によって、評判がガリラヤ周辺の全域に一気に広がることとなります。

3B 熱病の癒し 29-31

- 29 一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった。
30 シモンの姑が熱を出して横になっていたのので、人々はさっそく、彼女のことをイエスに知らせた。
31 イエスはそばに近寄り、手を取って起こされた。すると熱がひいた。彼女は人々をもてなした。

イエス様と弟子たちは会堂を出て行きました、「すぐに」とありますが、実際にペテロの家は、遺跡においてもすぐそばにあります。カペナウムの遺跡で、かつて会堂があったところの上に後世に会堂を建てている跡があり、当時のものは土台として見ることができます。そこを出ると、一分もか

からないところに、ペテロの家ではなかったか？と言われている所に、かつてビザンチン時代の教会に関連する建物の跡が残っています。それでペテロの家だったのではないかとされています。

ペテロには、姑がいました。つまり、ペテロには妻がいました。パウロがコリント第二で、妻をペテロは同行させていることについて少し言及しています。おそらく、ペテロは舅が死んだので、残されて寡になった姑を自分の家に引き取っていたのでしょう。彼女が熱病にかかっていた。一時的なものではなく、慢性的にそういう状態が続いていたのかもしれない。「人々はさっそく、彼女のことをイエスに知らせた」と言っていますが、すでに悪霊を追い出したその権威を、熱病に対して行使して下さると期待しているのです。すると、イエス様は彼女の手を取り起こされました。イエス様は多くの場合、触れてくださいます。私たちも、イエス様に触れられることができます。そして、熱が引いたので、人々をもてなしています。家では、しもべのような存在はいなかったのでしょう、姑がやりくりをしていました。

4B 戸口に集まって来る人々 32-34

32 夕方になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た。

33 こうして町中の人々が戸口に集まって来た。

悪霊を追い出し、熱病を治されたという知らせは、またたく間に広がっています。ここで、「夕方になり日が沈むと」とあるのは、安息日のためです。会堂で教えておられたのは、安息日ですが、その日は癒しを受けても安息日違反であり、癒しを行っても安息日違反です。けれどもそれは、人の勝手な解釈でした。ユダヤ人は日没から新しい日を数えていたので、日没になって彼らや一気にやってきたのです。

34 イエスは、様々な病気にかかっている多くの人を癒やされた。また、多くの悪霊を追い出し、悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。彼らがイエスのことを知っていたからである。

病を治され、そして悪霊を追い出されましたが、再び、ものを言うことを許可されませんでした。「彼らがイエスのことを知っていたからである」とあります。先ほど説明した通りです。

5B 別の町村への福音宣教 35-39

35 さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。36 すると、シモンとその仲間たちがイエスの後を追って来て、37 彼を見つけ、「皆があなを捜しています」と言った。38 イエスは彼らに言われた。「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはそこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。」39 こうしてイエスは、ガリラヤ全域にわたって、彼らの会堂で宣べ伝え、悪霊を追い出しておられた。

午前礼拝で、この箇所からお話ししました。イエス様は、ご自分の使命を忘れておられません。それは、祈ったからです。主のしもべとして、ご自身が弟子のようにして父なる神から聞いておられたからです。そして、癒しを求めているのが表面的になっているのを知っておられたので、それで、本来の目的である福音を伝えるために、一度、カペナウムから離れて他の町や村で伝えようと言われたのです。イエス様が、非常に忙しくなっていく中で、何が使命かを見失うことがなかったのは、祈りがあったからです。

3A 人々への証し 40-45

そして、実は次から新しい場面に入ります。「さて」という言葉から始まっていますね。これから、ユダヤ教の中における証しをされていきます。ここでは、祭司に対して、癒されたい病の人に証しを立てなさいと言われます。次、2章では、罪の赦しの宣言を律法学者の前で行われます。そうすることによって、「ヨハ 1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」ということを行われます。

40 さて、ツアラアトに冒された人がイエスのもとに来て、ひざまずいて懇願した。「お心一つで、私をきよくすることがおできになります。」

ツアラアトとは、らい病のことです。今は差別用語になってしまいましたが、私はそう呼ぶのが、当時の社会の状況をよく表していて、むしろ適切だと思います。神の律法の中で、らい病は儀式上、汚れた者とみなされました。らい病は、私たちの心に潜む罪、それがどんどん広がって、後で取り返すの付かない罪をよく表している、象徴しているものだったからです。らい病人は隔離されて、七日後に皮膚を調べられます。・・ところで、聖書の言っているツアラアト、らい病は必ずしもハンセン氏病だけではありません。他の重い皮膚病もありますし、壁にできたカビもツアラアトと呼ばれます。そして七日後に調べて、その症状が進行しているのであれば、その人は汚れた者とみなされます。汚れた者とみなされたら、「汚れている、汚れている！」と叫ばなければいけません。宿営から離れて生きなければいけないとされています。

けれども、彼は近づきました。ここに、福音を信じる第一歩があります。自分が汚れていると分かっている、いや分かっているからこそ近づきます。そのままの姿で、主の前に出るのです。そして、次に彼は「ひざまずいて懇願した」とあります。イエスが自分の主であることを認めている行為です。この方の前にひれ伏して、それで懇願しています。単なるお願い事を立てているではありません。私も幼い頃、てるてる坊主に天気になるように祈りましたが聞かれず、頭に来て悪態をついたことを覚えています。けれども、大学生の時に真面目に罪を告白して、悔い改めの祈りをしたことがあります。その時、主がそこにおられることが分かり、涙して感謝の祈りを捧げました。

そして、「お心一つで」と言っていますね。彼は、イエス様が癒す力のあることは疑っていません

でした、信じていました。けれども、それをなさりたいのかどうかは知りませんでした。この方が主権を持っているのだから、この方がそう思っておられるのであれば、癒すことができると願いました。

41 イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。42 すると、すぐにツアラアトが消えて、その人はきよくなった。

イエス様のお心でした、「深くあわれみ」とあります。これがイエス様の心です。私たちの心にある、罪、汚れに対する思いです。嫌うのでもなく、離れるのでもなく、深く憐れんでくださいます。その汚れによって、どれだけの惨めな状況だったのかを憐れんでくださいます。そして、最も大きなことは、「さわった」ということです。触れば、汚れます。けれども、イエス様は神から来た方です、その逆が起こります、触れられるとご自身が汚れるのではなく、相手を清めることがおできになるのです。これが福音です。良い知らせです、神の訪れであり、神の国がその人にやって来たのです。

43 イエスは彼を厳しく戒めて、すぐに立ち去らせた。44 そのとき彼にこう言われた。「だれにも何も話さないように気をつけなさい。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめのささげ物をしなさい。」

その癒された、元らい病人は、癒されたことを大いに喜んでいます。けれども、イエス様は癒すということが目的ではなかったのです、その癒しを通して、「神が生きておられる」ことを彼に証してもらいたかったのです。口で言うことではなく、ただ祭司に診てもらって、それで確かに神が来られたことを祭司にしてもらいたかったのです。実は、律法にはらい病であると決めることを祭司には命じているし、また清められた人を受け入れる儀式を行いなさいと命じられていますが、しかし、清めることについては書いていないのです。そこの戒めだけでは不完全で、肝心の清められる方法については書いていないのです。ですから、清めが起こった時には、それこそ神の訪れなのです。それで、神がこられた、メシアが来られたことを証しできるのです。

具体的には、レビ 14 章で、清められた者が二羽の鳥を持って来て、一羽を屠り、その血を水の中に入れます。そして、その生きていた鳥を、血の混じった水の中に入れ、解き放ちます。これはみな、キリストが流された血と、その後の甦り、そして水による清めを表しています。そして、血をその人に七度、振りかけます。さらに七日間、隔離して、本当に清められているのなら、清いと祭司は宣言します。そして八日目にいけにえを捧げます。それから、いけにえのうち、宥めのいけにえの血を取って、耳の右たぶ、右手の親指、右足の親指につけます。それから、同じ場所に、オリーブ油を塗ります。ここまでして、ようやく共同体の中に戻ることができるのです。ですから、イエス様はこういったことをきちんと行って、この人が身も心も救われて、それでイスラエル人として回復してほしいと願われたのです。

これは、ちょっと違いますが、ちょうど祈られて、体の癒しを経験した人が、病院にいて確かに癒されたことをお医者さんに確認してもらって、その診断書も出してもらって、それで社会復帰するようなものです。そういった一般の生活で確かに癒されたということを証ししなければ、本当の意味で、福音にはなりません。変えられた生活があって、壊れた人生の回復があって、初めて証しとなります。

45 ところが、彼は出て行ってふれ回り、この出来事を言い広め始めた。そのため、イエスはもはや表立って町に入ることができず、町の外の寂しいところにおられた。しかし、人々はいたるところからイエスのもとにやって来た。

彼は、イエス様の言われることを聞きませんでした。それで、何が起こったかという、イエス様はご自分がどのような方かを示す機会が半減してしまいました。なんか、魔法のように癒す人がいるんだ！みたいになってしまって、人々がどんどんやってくるだけで、本当に神の福音を求め、イエス・キリストの福音を求める人に出会えなくなってしまうからです。イエス様は寂しいところに行かれて、霊的に戦略を練り直したかったのですが、それもさせてくれず、至る所から人々がやってくるようになります。イエス様が、人気を博しているスターのようになってしまい、しもべの立ち位置にいるのが、難しくなってしまいました。

ここから学べることは、「自分のしていることを、人に見せない」という原則でしょう。山上の垂訓でイエス様が教えられたことです。人に見せるための善行をしてはならないということです。それは、良いことを人前で行わないということではなく、神が行なわれたのだということを知らせるため、神の栄光を帰するために、自分が目立たないということです。一人一人が、神に出会えるように、神の国の中に入れるように、そのことだけを心に留めていたということです。

今回はイエス様が、さらにご自身の本質について語られ、それで既存のユダヤ教の人々と、その解釈や慣習と衝突する場面を読んでいきます。